

中部地方建設局企画部企画課
服部 司 課長様

群馬大学工学部建設工学科
片田敏孝

中部地域整備効果レポート コラム記事について

先にご依頼のあったコラムの原稿ができましたので送らせて頂きます。原稿の文字数が随分多くなってしまったことお許し下さい。どうしても不都合がある場合は、文章を削る作業を行いますので連絡を頂ければと思います。

また、内容についてですが、河川災害のソフト対策の研究を始めて、まだ1年程度しかたっていないため、河川分野のテクニカルチームの使い方に問題があるかも知れません。河川の専門の方に見て頂いて、問題があるようであれば、適宜修正をして頂ければ幸いです。

以上、宜しくお願い致します。

-----以下原稿-----

ハードとソフトのバランスある治水対策の必要性

群馬大学助教授 片田敏孝

内陸山岳地帯に端を発する急勾配の河川や木曾三川下流部に広がる低平地を有する中部地域において、治水事業は古くから重要な公共事業に位置づけられ、治水施設の整備が着実に進められてきた。その甲斐あって、近年の中部地域の洪水被害は大きく減少しており、洪水に対する地域の安全性は飛躍的に向上してきた。

しかし、だからこその心配もある。それは洪水の頻度が低下したことによる住民の過剰な安心感の芽生えと、長年にわたる水害の歴史の中で育まれてきた災害文化の衰退である。かつての水害常襲地帯では、水害に対する備えが個々の家庭で行われていたし、地域コミュニティには、いわゆる災害文化と言われる自衛的機能も備わっていた。そして何よりそれぞれの住民が洪水の恐ろしさを心得ていて、洪水時には適切な対応を取る心構えも持ち合わせていた。しかし、長年にわたる洪水経験の中で培われてきた洪水の難を免れる知恵は、治水施設の整備による洪水頻度の低下とともに、忘れ去られようとしているのである。

治水施設の整備は、洪水による発災頻度を低下させることにおいてその重要性は指摘するに及ばない。しかし、治水施設は、高々数十年に一度、長くても100年に一度発生する規模の降雨に対応するためのものであり、長期的観点に立つならば超過洪水にまで対応できるものではない。洪水に対して無防備になりつつある住民と超過洪水の組み合わせの帰結を考えると、治水施設の整備に合わせて、人と社会に対する治水対策(ソフトな治水事業)を行うことの必要性はこのほか大きいと言わざるを得ない。ハードとソフトのバランスが取れた治水対策こそが、実効ある被害軽減効果を持つのである。

近年各地の自治体で、洪水発生時の予想浸水深や避難場所を明記した洪水ハザードマップが作成・公表されており、中部地域では愛知県豊橋市などがその公表を終えている。住民個人に自宅の予想浸水深を知らせ、自らがおかれている洪水に対する危険性を正しく認識させる試みとして注目していきたい。